尊敬要素「お」と「ご」の認可様式について

吉　田　幸　治

1. 序

ほぼ常識に類する知識ではあるが、印欧語の特徴として人称（person）、数（number）、性（gender）に関する一致現象を挙げることができる。近年の生成文法研究では、これらをまとめてファイ素性（ϕ feature）と呼び、統語的な操作、とりわけ構造の構築（structure building）に関わる非解釈素性（uninterpretable feature）と定義される。

これに対して、依拠する理論的立場によって相違があるが、日本語に関しては一致素性と考えられるものが想定しにくく、仮にあったとしても、非常に弱い形でしか観察されない。主語と動詞に関する限りでは、一致現象はないものと断じてしまっている研究者もいるぐらいである[1]。

しかしながら、Harada（1976）およびそれ以降の研究によって、日本語の敬語化（honorification）には印欧語と類似する一致現象が観察されることが明らかになってきた。例えば、次の（1a）では主語の「山田先生」は尊敬の対象とすることが可能であり、述語動詞に「お」を加えることに問題はないが、（1b）では主語が自分であり、尊敬の対象とすることは不可能である。

（1）　a．山田先生がお笑いになった。

　　b．*私がお笑いになった。

Harada（1976）はこうした現象をもとにして、以下のような規則を提案した（SSS は‘a person socially superior to the speaker’を意味する）。

（2）　A predicate receives the honorific prefix if its subject is an SSS.

（Harada（1976： 514））

つまり、尊敬の述語形式「お笑いになる」は主語に社会的に話者よりも上位にあると思われる人物が用いられた場合にのみ可能であることを変形の一種として定式化したのである。これは一般に主語尊敬化と呼ばれている[2]。

このように、主語尊敬化は一致現象として捉えるべき性質を有しているといえるが、他の尊敬語化がすべて文法的な一致現象として説明できるものかどうかに関しては検討の余地がある。

本稿の目的は、Harada（1976）の分類において遂行的敬語名詞（performative honorific noun、以下 PHN と略）と呼ばれた名詞句の頭部に現れる「お」と「ご」の認可様式を検討することによって、全ての敬語化が一致によるものではなく、PF における音韻調整規則（phonological adjustment rule）として取り扱うべき現象が存在することを示すことにある。

以下、2章では考察の対象とする PHN に関する現象を外観し、*v*P 内での一致現象として捉えることが難しい面があることを示す。3章では、音韻調整規則として定式化すべき根拠を示し、4章では文法内における認可様式を概略する。5章はまとめである。

2.　一致を要求しない「お」と「ご」

Harada（1976： 504）では次のものが PHN の例として挙げられている[3]。

（3）　a．おビール
　　b．お花
　　c．お幾ら
　　d．お人形
　　e．お醤油
　　f．お天気
　　g．お茶

ここで注目すべきことは、原田自身が次のように述べている点である。

（4） Such honorifics are often used in contexts in which no SSS appears in the propositional content or in the environments irrelevant to the occurrence of the honorifics.

（Harada（1976： 504））

つまり、（2）にみられる「お」は一致を要求すべき要素つまり SSS が存在しなくとも使用可能であり、この場合には主語や述語によって認可される必要がないということになる。換言すれば、*v*P 投射内において成立していなくてはならない照合において必要とされる Spec-head の関係や Probe-goal の関係が存在していないということである。

同様に、漢語の場合にも「お」が用いられ、認可要素を要求しない事例が存在する。

（5） a．お弁当
b．お電話
c．お元気
d．お料理
e．お写真
f．お天気

（Harada（1976： 504））

ただし、漢語の場合には「ご」が用いられるのが一般的である。

（6） a．ご病気
b．ご家族
c．ご著書
d．ご結婚
e．ご旅行
f．ご成功

（Harada（1976： 504–505））

ここで原田が挙げている例を検討してみると、あることに気づくはずである。「お」と「ご」では後続する名詞との結合度に違いがあることである。つまり、（6）においては「ご」が尊敬または丁寧な響きを持つ一方、（3）（5）の「お」はそれほど丁寧な響きを持たない。そのうえ、（3）（5）では語調の点で「お」を含む形式の方がより一般的であると思われるものもある。筆者の言語直観では特に次のものは「お」を欠く形式よりもより広範に用いられるものと感じられる。

（7）　a．お花
　　b．お人形
　　c．お天気
　　d．お茶
　　e．お弁当
　　f．お電話
　　g．お元気
　　h．お料理
　　i．お天気
　　j．お菓子
　　k．お風呂
　　l．お勉強
　　m．お土産
　　n．お魚

この点は複合語の場合により顕著になる。

（8）　a．お花畑
　　b．お茶汲み
　　c．お水取り
　　d．お墓参り
　　e．お弁当箱

もちろん、「お」を欠く形式も頻度は低いというわけではないが、口語体、日常会話においては「お」を伴う形式の方が一般的であるといえよう[4]。これに関して一つの証拠になるのが歌謡曲や童謡である。

（9） a．お弁当、お弁当うれしいな……
b．これくらいの、お弁当箱に、おにぎり、おにぎり……
c．お魚くわえたドラ猫、追っかけて……

（9）においてもし「お」を省略すると、極めて不自然な発音を強いられることになる。ではなぜこうした傾向が見られるのであろうか。

3. 日本語固有のリズムと音韻調整

ここで鍵となるのは日本語固有のリズムである。別宮（1977）が指摘したように、日本語は2拍を1単位とし、これを2倍にした4拍子を基本単位とする言語である。さらにこの4拍子を2倍にすれば8拍子になる。俳句や短歌なども、表面的には五七五（七七）となっているが、休符を考慮すれば八八八（八八）となる[5]。つまり、日本語においては2モーラを基本とし、その倍数の拍が好まれるのである。このように考えることによって「お」が好まれる事例を音韻的に説明することが可能になる。

（7）において、それぞれの名詞に着目するとその多くが2モーラ（「花」「菓子」など）または3モーラ（「土産」「魚」など）となっている。2モーラの場合はそのままでも日本語の基本単位として使用可能であるが、可能な限りより好ましい4モーラにしようとする力が働く。3モーラの場合はそのままでの使用をできるだけ避けようとする力が働く。その結果、次の3つの音韻調整の一つを利用することになる。

(10) a．休符によって偶数拍にする。
b．助詞・格助詞によって偶数拍にする。
c．前に「お」をつけることによって偶数拍にする。

例えば、「魚」を例にすると次のいずれかが好ましい形式として選択される（[休] は休符を表す）。

(11)　a．魚［休］食べよう。（4モーラ）

b．魚を食べよう。（4モーラ）

c．お魚食べよう。（4モーラ）

休符の場合は微妙な部分もあるが、いずれの手段を用いても4モーラに収まることに注意されたい。他の場合も同様である[6]。

したがって、音韻的な観点からまとめると PHN の生起条件を次のように定式化することができる。

(12)「お」付与規則（随意）：偶数拍となるように名詞の直前に「お」を加えよ。

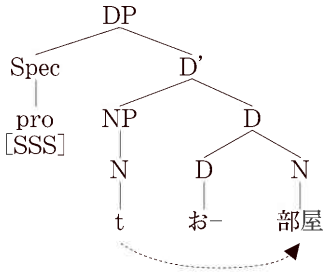
4.　認可様式

4.1.　二種類の構造

前節では日本語の基本的なリズムが要求する音韻調整規則としての「お」が要求されることを見た。本節では具体的な構造とその認可様式について見ておくことにする。

Hasegawa（2006）では主語尊敬化の構造として次のような構造が提案されている。

(13)



（Hasegawa（2006： 510））

(13) では、「お」がDの主要部であり、pro とNは Spec-head の関係を有している。これによって pro が持つ素性［SSS］の照合が可能になる。

ただし、本稿で扱ってきた「お」に対してこのシステムをそのまま応用することはできない。(13) は述語との一致を前提にしているからである。

そこで本稿ではさらに別の構造を仮定する。「お」をDの主要部とは考えず、Xバー理論でい

うところの指定部（Spec）の位置に生成されるものであると考える。つまり、次の（14）のような構造を仮定することになる。

（14）［Spec お［D' 魚］］

「魚」だけで NP を生成し、「お」は DP の指定部の位置に生成されると考える。本来、指定部に現れる要素は同一投射内に存在する主要部と一致しなくてはならないが、Fukui（1986）が指摘しているように、日本語では必ずしも一致が強制されるわけではなく、指定部が複数回利用されても問題はない。つまり、もともと指定部の位置は自由に利用できる位置として存在していると考えられる。

4.2. 有生性と慣用化の原則

ここで「お」が利用できない場合を考えておこう。

（15） a．*お地球
b．*お太陽
c．*お麦

主要部名詞が漢語ということも関わっているが、この場合は「ご」であっても付加することができない。おそらく、「お」「ご」をつけることが可能な名詞には次の二点が関わっているようである。

（16） 有生性（animacy）

（16）は名詞の指し示す対象が生物であるか否かによって区別されることであり、一般に次の階層[7]に従うと言われている（Payne 1997）。

（17） Animacy Hierarchy
一人称＞二人称＞三人称＞固有名詞＞人間＞人間以外・生物＞無生物

この階層によって語順の決定がなされるのである。

無生物を表わすものや出来事名詞（event noun）には「お」と「ご」がつきにくいことは明らかであり、(15) の例はこの点から説明可能であろう。つまり、日本語では基本的に無生物には「お」「ご」はつかないということである。

しかし、（3）と（5）－（8）で見たような例はすべて無生物であり、この視点からは説明しきれない。次のような例も存在する。

(18)　a．お豆
　　b．お台場
　　c．お受験
　　d．おバカ

こうした例を説明するためにはまず次の原則を導入する必要がある[8]。

(19)　慣用性の原理（principle of conventionality）：
　　他の文法的制約[9]に違反しない限りにおいて、新しく導入された表現形式は使用頻度が高くなるほど慣用化され、常用されることによって容認可能な表現となる。

要するに、聞きなれない語彙や表現も、たびたび使用されることによって慣用として認められるようになるということである。

(18) の例でいえば、(18a) の「お豆」は食料品[10]であることに加えて、日常的に接することが多いものである。(18b) の場合、「お台場」はそもそも徳川幕府の時代に砲台が設けられた地であり、その地に対して一般の人々が敬意と親しみを込めて「お」をつけたことが慣用化したものである。(18c) (18d) は比較的近年になって登場したものであるが、いわゆる緩叙法（meiosis）として「お」をつけることによって、名詞の持つマイナス面を打ち消そうとして用いられてきたのが慣用化したものと考えられる[11]。

もちろん、慣用化が生じる場合であっても(12)の条件は守られていることに注意されたい。「お」をつけることが可能となる音韻的な条件が整ったうえで、慣用化の原理が働くのである。

4.3. 後続する「さん」と「さま」

ここで「お」が付く名詞に「さん」や「さま」が後続することが多い点も考察しておくことにする。

まず注意すべき点として、「さま」の方が「さん」よりもフォーマルで使用範囲が狭いことが挙げられる。したがって、親族名称などでは「さん」の方が好まれることになる。つまり、「おじさん」や「おばさん」がより一般的であり、「おじさま」や「おばさま」は、小説やドラマでの頻度は高いものの、堅苦しい響きが感じられる。

また、「さま」は 2 モーラ、「さん」は 1 モーラとなる点にも注意しておきたい。

こうした点を押さえておいて、次の例をみてみよう。

(20) a．お父さん
b．お母さん
c．おかみさん
d．お稲荷さん

(20a)（20b）では「さん」をつけて使用する方が一般的であるが、(20c)（20d）では「さん」が現れない形式も一般的である。

この違いは、前者の場合には、「さん」を用いれば後の休符を含んで 4 モーラになるが、用いなければ 2 モーラで終わってしまう点にある。2 モーラは完全に不可とはならないができるだけ避けたい単位だからである。これを例証する現象として、一部の方言で呼びかけとして（21）を用いる場合には、最後の母音を伸ばすことで 4 モーラにおさめようとする傾向があることを挙げることができる[12]。

(21) a．お父→おっとー
b．お母→おっかー

他方、(20c)（20d）では「さん」を後続させなくても休符を含めることで 4 モーラにおさめることが可能である。つまり、「さん」を積極的に使用する音韻構造ではないのである。

もちろん、「さん」「さま」が後続しやすい名詞であればあるほど「お」がつけやすいというこ

とはあるが、それぞれの分布には必ずしも一致が見られない。例えば、次例（22）では、（22c）だけがやや不自然に感じられる。

（22）　a．　お殿さま
　　b．　お殿さん
　　c．?お殿
　　d．　殿さま
　　e．　殿さん
　　f．　殿

また、日本語では職階や地位を呼びかけに使うことが多いが、この場合も（23）のような現象が見られる。

（23）　a．*お社長さま
　　b．*お社長さん
　　c．*お社長
　　d．　社長さま
　　e．　社長さん

これは「部長」や「学長」「会長」などでも同じであり、「さま」「さん」と「お」の分布が異なっていることを示している。こうした考察から、日本語では職階と地位は固有名詞と同じような扱いになっており、「お」とは馴染まない要素だということがわかる。親族名称と職階・地位は敬意の有り様が異なっているのである。

したがって、一部の生成文法家が提案する可能性のある、目に見えない要素として「さま」が現れている場合に「お」が認可されるという考え方には無理があることがわかる。

5.　結　　語

本稿では述部とは独立して現れることができる「お」について考察を行い、（12）の音韻調整規則と二種類の構造を示した。さらに、現実に可能な表現と不可能な表現について、そこには慣

用化の原理が働いていることも示した。

音韻部門と統語部門がそれぞれ自律した体系をなしているということに関しては様々な研究が行われてきているが[13]、ここで示した音韻調整規則と認可システムとの関係をより深く考察することで語彙と統語の関係についての理解も深まるものと思われる。

漢語に現れやすい「ご」の認可システムと奇数拍でも容認される現象に関してより詳細な考察が必要となるが、これに関しては他の助詞・格助詞も含めて考察する必要がある。また、慣用化の原則の具体的な適用規則に関しても考察する必要がる。これらについては今後の課題としたい。

注

1 Fukui（1986）、Kuroda（1992）などを参照。

2 主語尊敬化現象をミニマリストの枠組みで捉えなおした論考には、Toribio（1990）、Ura（1999）、Hasegawa（2006）、Boeckx and Niinuma（2004）などがある。

3 Harada（1976）は英文で書かれたものであるが、以下では原著論文に見られる例文の英文表記を日本語にして示す。

4 この点に関してコーパスや Google で検索し、その結果を単純比較することは無意味である。なぜなら、「花畑」を検索するとその結果には「お花畑」も含まれてしまうため、ヒット数は「花畑」の方が圧倒的に多いことになってしまうからである。正しい頻度の比較を行うための検索条件を指定することは不可能ではないが、適切に比較を行うことは困難である。

5 別宮（1977）では、1音に8分音符を1つあて、2音をもって4分の4拍子の1拍を作るものと分析されている。

6 「お」を加えることによって3モーラとなってしまう例（「お菓子」、「お風呂」など）が存在するが、現実の発話においては直後に助詞・格助詞または休符を加えて4モーラとして使用することが多い。つまり、必ずしも日本語の音韻規則の例外ということにはならない。

(i) お風呂に入ろう。

(ii) お菓子［休］食べたい。

7 有生性の階層に関しては言語や地域によって様々なものがあるが、ここでは最も一般的と思われるものを挙げた。

8 慣用化（Conventionality）という用語は Qurik et al.（1985）の用語で、もともと存在しなかった特定の言語形式、特に複合語などが一定の範囲内で可能となる事例を説明するために用いられている。文法化（Grammaticalization）と重なる部分もあるが、慣用化は比較的短い時間で起こる現象であり、文法化と一致するものではない。本稿では Quirk et al. とは少し異なる意味で用いる。

9 ここで言う他の文法規則とは、語彙阻止（lexical blocking）や主要部パラメーター（head parameter）などを含む。

10 2節でみたように「お」がつく名詞には食料品と動物が多いが、それは日常的に使用されるもの

として慣用化されやすいことが理由として考えられる。

11 (17c)(17d)のような表現に対して不快感を持つ人も少なくないが、慣用化が生じる背景として、こうした人々の意見はほとんど無視されるか軽視される背景がある。こうしたいわゆる一般大衆の無反省さや価値観の有り様に関する考察としては児玉(2006)(2008)を参照されたい。

12 関西では「おとん」「おかん」という表現もあるが、これは拍だけではなく音調も含めて別の観点から考察すべき音韻現象である。

13 記号列に対して音韻調整規則が作用することこそが統語部門の自律性を証明することにほかならないという議論に関しては、Woisetschlaeger (1980)を参照。

参考文献

別宮貞徳. 1977.『日本語のリズム』. 講談社.

Boekx, Cedric. and Fumikazu Niinuma. 2004. "Conditions on Agreement in Japanese", *Natural Language and Linguistic Theory* 22, pp. 453–480.

Collins, Chris. 2002. "Eliminating Labels", in S. D. Epstein and T. D. Seely (eds.), *Explanation and Derivation in the Minimalist Program,* Blackwell, Oxford, pp. 64–42.

Frampton, John and Sam Gutmann. 2000. *Agreement as Feature Sharing,* ms., Northeastern University.

Fukui, Naoki. 1986. *A Theory of Category Projection and Its Application,* Ph. D. dissertation, MIT.

Fukui, Naoki. 1995. "The Principles-and-parameters Approach: A Comparative Syntax of English and Japanese", in M. Shibatani et al. (eds.), *Approaches to Language Typology,* Oxford University Press, Oxford, pp. 327–372.

Harada, Shin-Ichi. 1976. "Honorifics", in M. Shibatani (ed.), *Syntax and Semantics* 5, Academic Press, New York, pp. 499–561.

Hasegawa, Nobuko. 2006. "Honorifics", in M. Everaert and H. van Riemsdijk (eds.), *The Blackwell Companion to Syntax vol.* 2, Blackwell, Oxford, pp. 493–543.

Johnson, Kyle. 1991. "Object Positions", *Natural Language and Linguistic Theory* 9, pp. 577–636.

Kayne, Richard. 2000. *Parameters and Universals,* Oxford University Press, Oxford.

児玉徳美. 2006.『ヒト・ことば・社会』. 開拓社.

児玉徳美. 2008.『ことばと論理―このままでいいのか言語分析』. 開拓社.

Koizumi, Masatoshi. 1995. *Phrase Structure in Minimalist Syntax,* Ph. D. dissertation, MIT.

Kuroda, S.-Y. 1992. *Japanese Syntax and Semantics,* Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.

Larson, Richard. 1988. "On the Double Object Construction", *Linguistic Inquiry* 19, pp. 335–391.

Nemoto, Naoko. 1993. *Chains and Case Positions: A Study from Scrambling in Japanese,* Ph. D. dissertation, University of Connecticut.

Payne, Thomas E. 1997. *Describing Morphosyntax: A Guide for Field Linguists.* Cambridge University Press, Cambridge.

Pylkkänen, Lina. 2002. *Introducing Arguments,* Ph. D. dissertation, MIT.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* Longman, London.

Richards, Norvin. 1997. *What Moves Where When in Which Language ?,* Ph. D. dissertation, MIT.

Shibatani, Masayoshi. 1977. "Grammatical Relations and Surface Cases", *Language* 53, pp. 780–809.

Takahashi, Daiko. 1994. *Minimality of Movement,* Ph. D. dissertation, University of Connecticut.

Takano, Yuji. 1998. "Object Shift and Scrambling", *Natural Language and Linguistic Theory* 16, pp. 817–889.

Toribio, Almeida. 1990. "Specifier-head Agreement in Japanese", in *Proceedings of WCCFL* 9, CSLI, Stanford, pp. 535–548.

Ura, Hiroyuki. 1999. "Dative Subjects in Japanese and Korean", *Journal of East Asian Linguistics* 7, pp. 223–254.

Ura, Hiroyuki. 2000. *Checking Theory and Grammatical Functions in Generative Grammar,* Oxford University Press, Oxford.

Woisetschlaeger, Erich. 1980. "A Note on the Autonomy of Syntax", *Journal of Linguistic Research* 1, pp. 55–70.